

令和 2 年 4 月 11 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03167

研究課題名(和文) ミンスクのホロコースト - - ベラルーシ現代史におけるその歴史的位相

研究課題名(英文) Holocaust in Minsk

研究代表者

野村 真理 (NOMURA, MARI)

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：20164741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、バルト三国等との比較を念頭におきつつ、ベラルーシの首都ミンスクにおけるホロコーストの特徴を明らかにすることであった。研究の結果、ベラルーシでは、特に社会主義教育を受けた新世代の間で、非ユダヤ人とユダヤ人の間に社会主義的連帯意識の育成が見られること、この連帯意識のもと、ホロコースト期のミンスクでは、コミュニストによる対ナチ抵抗運動が、限界を伴いながらもゲットーのユダヤ人の救出に一程度の役割をはたしたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ベラルーシの首都ミンスクが、ワルシャワとモスクワを結ぶ直線上のほぼ中央に位置することからもわかるように、ベラルーシは、歴史的に地政学上の重要地域であったにもかかわらず、日本にはベラルーシ史研究を専門とする研究者はほとんどいないといえる。その意味で本研究は、ホロコーストという特殊テーマを介してではあるが、ベラルーシ現代史に関して有用な知見を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the characteristics of the Holocaust in Byelorussian Soviet Socialist Republic's capital, Minsk, in comparison with the Baltic countries etc. My research has shown that Byelorussia has developed a socialist solidarity awareness between non-Jews and Jews, especially among the new generations who have received a socialist education. In Minsk, it was revealed that the anti-Nazi resistance movement of this new generations played a role, albeit limited, in the rescue of the Ghetto Jews.

研究分野：ヨーロッパ近現代史

キーワード：ホロコースト ミンスク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ホロコースト研究の主流は、(1)最終的に絶滅政策へいたるナチ・ドイツのユダヤ人政策の決定過程を考証するものと、(2)ユダヤ人が被った迫害の凄まじさを検証するものとに2分される。

これに対して野村は、上記(1)(2)とは別個の研究観点にたち、第一次世界大戦後、東ヨーロッパを含めて国民国家体制へと移行したヨーロッパで、ホロコーストがそれぞれの「国民国家史」のなかでもった意味を探求してきた。そこで問われるのは、ホロコースト以前のユダヤ人と非ユダヤ人の社会的関係、ホロコーストにおけるナチと非ユダヤ人の協力関係(コラボ)、戦後のホロコーストをめぐる歴史認識等であり、これまで特に野村が着目したのは、東中欧(ドイツとソ連に挟まれた中欧東部地域)の諸国家である。

第一次世界大戦まで東中欧を支配したロシア、オーストリア帝国で、「多民族帝国内の少数民族」であったユダヤ人は、戦後、民族自決の原則で東中欧諸国が独立したことにより、それぞれの国家で「国民国家内少数民族」に転じた。これら国家では、国家民族とは宗教(ユダヤ教)、風俗習慣、言語(イディッシュ語)が異なるユダヤ人が都市部に集中して居住し、その人口比をはるかに超える割合で商業・金融業や職人業に従事する現状は、異常事態と見なされる。そのため、程度の差はあれ、どこでも国家規模での反ユダヤ主義が活性化したが、事後的に見るときホロコーストは、これら国家が戦間期に自力では解決できなかった「ユダヤ人問題」を解消することになった。

なかでも1939年8月の独ソ不可侵条約秘密議定書の結果、ソ連に併合されたバルト三国ならびにポーランド東部(現在の国境では西ベラルーシ)や東ガリツィア(現在の国境では西ウクライナ)の様相は複雑である。併合に抵抗する当地の民族主義者は、独ソ戦において侵攻するナチ・ドイツにソ連支配からの解放者を見出し、同時にその一部はナチによるユダヤ人殺害の協力者となった。このホロコーストへの加担(コラボ)問題は、それぞれの国民国家史に大きな屈折を与えることになる。

では東中欧諸国と比較するとき、ナチ・ドイツがソ連支配からの解放者という認識が成立しなかったベラルーシ・ソヴィエト社会主義共和国において、ホロコーストはベラルーシ現代史のなかにいかに位置づけられるのか。この問いの探求が本研究の出発点となった。なお、ベラルーシの国境は第二次世界大戦後、ポーランド東部(西ベラルーシ)を併合して大きく拡大した。本研究の対象は、現在の国境では東ベラルーシにあたる。

2. 研究の目的

上記の背景のもと、本研究では、第二次世界大戦以前、ユダヤ人人口が約40%を占めたベラルーシの首都ミンスクのホロコーストを研究対象とし、第1に、ホロコースト以前のミンスクにおけるユダヤ人と非ユダヤ人の社会的関係を明らかにすること、第2に、ミンスク・ゲットー内の対ナチ・ユダヤ人抵抗組織とゲットー外のコミュニストによる抵抗組織やパルチザンとの連携関係に着目し、その実態を明らかにすることを主たる研究目的とした。さらに、本研究の期間内に具体的な研究成果を出すことは困難と予測されたが、第3の研究目的として、第二次世界大戦後、ソ連時代のベラルーシにおけるホロコースト認識の解明を掲げ、以上によって、ホロコーストをベラルーシ現代史のなかに位置づけることをめざした。

3. 研究の方法

オーソドックスな歴史研究の手法にしたがい、1.本研究に関連する既存の研究文献を渉猟しつつ、知識の深化と自身の問題意識の明確化をはかり、2.発見した第一次史料ならびに公刊さ

れた文書館史料集等を用いて歴史的事実関係を再構築し、3 .それらを自身の問題意識に照らして整理していった。第一次史料の収集については、とくに回想記類の発掘に力を入れた。

4 . 研究成果

機会を得て、予定より早く研究期間1年目にミンスクの調査旅行が実現し、ミンスク・ゲッソーならびにユダヤ人の大量虐殺現場となったマーリィ・トロスティネツについて、具体的なイメージを持つことができた。また、1年目の調査旅行中に訪問したユダヤ博物館館長より、ミンスク・ゲッソー抵抗運動の生き残りの一人であるヘルシュ・スモラルが1946年にモスクワで刊行した貴重なイディッシュ語の回想記を譲り受けるという幸運が重なり、研究は、予想より順調なスタートを切ることができた。

第1の研究目的、すなわちホロコースト以前のミンスクにおけるユダヤ人と非ユダヤ人の社会的関係についていえば、ロシア帝国時代、ユダヤ人定住地の北部にあたるベラルーシ地域は、定住地南部のウクライナと比較してユダヤ人人口の密度に大差がないにもかかわらず、ユダヤ人に対する集団的暴行がほとんど発生しなかったことで知られる。このことは、ベラルーシ人とユダヤ人の関係が親密であったことを意味せず、むしろ農民がほとんどであるベラルーシ人と、主として商業、職人業に従事するユダヤ人は、端的に別の世界に住む人々であった。

しかし、両者の関係は、ソ連時代に劇的に変化する。ソ連では、1928年から34年にかけて、国策として反ユダヤ主義撲滅キャンペーンが展開され、回想記を読むと、ベラルーシでは、社会主義教育を受けた新世代のあいだで、コムソモール等での活動を通じ、非ユダヤ人とユダヤ人の間に連帯意識が育まれたことが観察される。このことは、両大戦期ポーランドやリトアニアで青少年期を過ごしたユダヤ人の回想記の多くが生々しい反ユダヤ体験を語るのとは対照的である。

第2の研究目的、すなわちミンスク・ゲッソー内の対ナチ・ユダヤ人抵抗組織とゲッソー外の коммуニストによる抵抗組織やパルチザンとの連携関係についていえば、ナチ・ドイツに対して抵抗運動を展開したポーランド国内軍やリトアニア人戦線が、反ユダヤ主義的な自民族解放運動であったのに対し、ミンスクの коммуニストによる抵抗運動は、解放から異民族としてのユダヤ人を排除する論理を持たず、またユダヤ人抵抗運動の構成員とのあいだで、戦前のコムソモール活動等を通じての友人関係も存在した。

ミンスク・ゲッソーの抵抗運動は、ゲッソー内での蜂起をめざさず、ユダヤ人を森で展開するパルチザンのもとへ脱出をさせる作戦をとる。戦闘集団であるパルチザンの場合、戦闘員となりえないユダヤ人の受け入れを拒否する部隊もあったが、パルチザンに受け入れられたユダヤ人のなかからユダヤ人のみで構成されるパルチザン部隊も結成された。ナチによる圧倒的な武力支配下であって、ユダヤ人救出作戦には大きな限界があったものの、ゲッソー内の抵抗運動がゲッソー外の抵抗運動から孤立していなかったことの意味は評価されるべきであることが明らかになった。

以上の研究成果は、「ミンスクのホロコースト ユダヤ人抵抗運動の成果と限界 前篇、後篇として、『金沢大学経済論集』第39巻、第1号(2018年) 第2号(2019年)に掲載した。

最後に第3の研究目的、すなわち第二次世界大戦後のベラルーシにおけるホロコースト認識については、ソ連全体と同様、戦後ベラルーシにおいてもホロコーストの記憶が抑圧されたが、これについては、個別の事実関係を確認するにとどまった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 野村真理	4. 巻 39(2)
2. 論文標題 ミンスクのホロコースト ユダヤ人抵抗運動の成果と限界（後篇）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学経済論集	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野村真理	4. 巻 39(1)
2. 論文標題 ミンスクのホロコースト ユダヤ人抵抗運動の成果と限界（前篇）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金沢大学経済論集	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野村真理	4. 巻 31
2. 論文標題 書評「清水陽子著『ユダヤ人虐殺の森 リトアニアの少女マーシャの証言』（群像社、2016年）」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野村真理
2. 発表標題 ミンスク・ゲッターの抵抗運動 成果と限界
3. 学会等名 シンポジウム「ソ連・東欧のホロコースト」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野村真理
2. 発表標題 帝国・国民国家・ユダヤ人 第一次世界大戦と中東欧のユダヤ人
3. 学会等名 愛知教育大学歴史学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野村真理
2. 発表標題 シュアールからナクバへ
3. 学会等名 歴史家協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Mari Nomura, Yuu Nishimura, Grzegorz Krzywiec, Kamil Kijek, Haruka Miyazaki, Shigechika Suzuki, Hisashi Shigematsu	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Kanazawa University	5. 総ページ数 156
3. 書名 Polish-Jewish Relations and Anti-Semitism	

1. 著者名 野村真理、橋本伸也、小森宏美、梶さやか、吉岡潤、森下嘉之、福田宏、姉川雄大、高草木邦人、立石洋子、重松尚、百瀬亮司	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 303
3. 書名 せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題 ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤	

1. 著者名 Mari Nomura, Yuu Nishimura (ed.)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Kanazawa University	5. 総ページ数 212
3. 書名 Yiddishism and Creation of the Yiddish Nation	

1. 著者名 向井 直己、赤尾 光春、野村真理 他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 329
3. 書名 ユダヤ人と自治 中東欧・ロシアにおけるディアスポラ共同体の興亡	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----